日本簿記学会ニュース

No. 68:12 ／ 2019

《大会・部会の経過報告》

第 35 回関東部会は，2019 年 6 月 22 日（土）に小樽商科大学（準備委員長：籏本智之氏）にて、第 35 回全国大会は，2019 年 8 月 23 日（金）から 25 日（日）に中央大学多摩キャンパス（準備委員長：上野清貴氏）にて開催されました。詳しい内容は本紙大会・部会記をご覧ください。

《大会・部会のご案内》

第 36 回関西部会は 2020 年 5 月に別府大学にて，第 36 回関東部会は 2020 年 6 月に立教大学にて，第 36 回全国大会は，2020 年 8 月に京都産業大学にて各々開催される予定です。

《第 35 回全国大会正会員出席状況》

第 35 回全国大会への正会員の出席者の状況は以下の通りでした。

	全　体	大学関係者	高等学校	専門学校	職業会計人	その他
参加者数	179 名	143 名	23 名	2 名	8 名	3 名
比　　率	100.0%	79.9%	12.8%	1.1%	4.5%	1.7%

《日本学術会議協力学術研究団体登録について》

日本簿記学会は、本年 7 月 25 日に日本学術会議協力学術研究団体として指定されました。

《令和２・３ 年度研究部会の募集》

令和２・3 年度の簿記理論研究部会，簿記実務研究部会，簿記教育研究部会を下記の通り募集いたします。申し出は，研究テーマ・メンバーを明記の上，事務局宛にお願いいたします。締切は，令和２年３月 31 日です。

（1）研究期間は，第 36 回全国大会（令和２年）会員総会承認から２年です。
（2）研究成果の報告は，１年経過後の第 37 回全国大会（令和３年）における中間報告および第 38 回全国大会（令和４年）における最終報告の２回となります。
（3）研究成果につきましては冊子を作成いただきます。
（4）研究部会費は 1 部会 200,000 円（年間）です。
（5）研究部会メンバーは当学会会員とします。
（6）研究部会メンバーの人数に制限はありません。

《日本簿記学会学会賞審査委員会からのお願い》

学会賞審査委員会では，会員の皆様からの学会賞候補にふさわしい著書等のご推薦をお願いいたします。推薦の手続等については，学会ホームページをご確認ください。また，推薦書籍等については５部ご提出ください。

日本簿記学会学会賞審査委員会

《日本簿記学会会則改正について》

日本簿記学会会則について下記の通り改正がなされました。

新	旧
昭和60年10月12日制定 令和元年8月24日最終改正 （役員） 第９条　本会に次の役員をおく。役員の任期は３年とする。ただし，会長および副会長は，重任することができない。理事および監事は，連続２期を超えて就任することはできない。 （1）　会長　　１名 （2）　副会長　２名 （3）　理事　２５名以内 （4）　監事　　２名 （5）　幹事　　８名以内 ２．役員の任期満了による交代の時期は，第３条（1）に規定する大会終了のときである。	昭和60年10月12日制定 平成30年8月24日最終改正 （役員） 第９条　本会に次の役員をおく。役員の任期は３年とする。ただし，会長および副会長は，重任することができない。理事および監事は，連続２期を超えて就任することはできない。 （1）　会長　　１名 （2）　副会長　２名 （3）　理事　２５名以内 （4）　監事　　２名 （5）　幹事　　５名以内

《令和元年度日本簿記学会学会賞および奨励賞について》

本年度の日本簿記学会学会賞および奨励賞は，審査の結果，ともに授賞対象なしとされました。

《選挙管理委員会》

令和元年８月23日（金）に開催されました第35回全国大会会員総会において，第36回全国大会時に行われる役員選挙に向けて，選挙管理委員会が設置されることが報告されました。委員会のメンバーは以下の通りです。

選挙管理委員：委員長　上野清貴（中央大学）
委　員　池田公司（甲南大学），梅原秀継（明治大学），佐々木隆志（一橋大学），清水泰洋（神戸大学）

幹事：石光　裕（京都産業大学），小澤康裕（立教大学），小阪敬志（日本大学），中村亮介（筑波大学），兵頭和花子（兵庫県立大学），松下真也（京都産業大学），吉田智也（中央大学）

《関東部会記》

日本簿記学会第35回関東部会記

小樽商科大学準備委員長　籏　本　智　之

本年６月22日に小樽商科大学において準備委員長籏本智之のもと，第35回関東部会が開催された。冒頭，小樽商科大学・石川業氏が，統一論題「近年の北海道における簿記事情」について，次のように解題した。小樽ないし北海道における簿記の「地域性」を意識しながら，小樽高商以来の，実業界や会計業界との関わりに加え，教職課程等を通じた商業教育と，近年における行財政との関わりも意識した論題である。次に本編に入る前に，各報告に関する予備知識が提供された。小樽は，かつての商業・金融都市から現在は観光都市へ変化する中で，出生率は全国・北海道平均より低く，逆に，高齢化率は全国・北海道平均より高い。北海道に広く分布している商業高校・商業科は学校数，入学生数ともに減少を続

けている。広い面積ゆえに，北海道は全国平均の２割ほどの人口密度しかならず，行政サービスは距離ゆえの非効率な展開を余儀なくされている。

第１報告　髙久文夫氏（澤の露本舗・代表）「小樽における商業の歴史と青色申告の現状に見る今後の課題」。髙久氏は経営者でもあり，小樽商工会議所の青色申告指導員も務めている。小樽商都の歴史を古今の写真とともに紹介し，商都における会計教育機関として1910年代から小樽商科大学と小樽商業高校が役割を果たしてきた。続いて，青色申告制度とそれを小樽で支えている小樽青色申告会連合会の活動内容を説明した。青色申告法人の簿記事情として，e-Tax連動の会計ソフトにより複式簿記による決算が行われている。一方，開始仕訳で未払金を失念し決算時に試算表の合計が一致しないという，理解が不足したままソフトを扱う事例が多く，本質的な理解の啓蒙が課題である。青色申告者数は増えており，簿記能力に対するニーズが高まっており，これにどのように応えていくのかも課題とした。

第２報告　前中孝洋氏（小樽商業高校・教頭）「札幌国際情報高等学校における簿記教育のあり方と課題―北海道の商業高校における傾向を踏まえて―」。前中氏が本年３月まで勤務していた札幌国際情報高等学校グローバルビジネス科は，大学進学学習と高度な資格取得を目標とし，２年次から情報・国際・会計の３コースに分かれて，多様な進路希望に対応して学ぶ学科である。普通科と商業科の両面を持ち，通常の商業科に比べ，簿記・会計関連の時間数が少なく，普通科型の科目を多く配置することで，推薦入試だけではなく一般入試での受験も可能にしている。簿記科目について詳細に報告し，課題として，資格取得中心の授業展開となり，企業や大学で求める簿記の学習水準や資格の明確化を望むと主張した。１年次に簿記は週２時間と少なく，簿記学習の定着化が課題となっている。また，生徒が主体的に取り組む授業への転換が必要であり，授業の内容や方法の検討が不可欠である。４年後からは新学習指導要領でアクティブラーニングの導入が決まっており，評価の準備が迫っている。さらに，企業や大学との教育での連携・協力を推進すべきであり，目標や人材像について共有を図り，それぞれの役割を明確にすべきであると主張した。

第３報告　林谷昌美氏（日高町役場）「日高町における財政上の課題と簿記の役割―北海道の町が抱える事情の一例として―」。林谷氏は，日高町の財政状況を指標に基づいて類似団体と比較して説明した。日高町は2015年からのJR不通，2016年の豪雨災害，昨年の北海道胆振東部地震の被害もある中で，高水準のインフラ投資が続いており，財政が厳しい状況になっている。現在，自治体経営の中で発生主義会計による複式簿記を明確に理解している者が少なく，方向性に確信なく自治体運営がなされていると指摘され，発生主義会計による複式簿記を一層理解してもらい，財政の現状を正しく認識してもらうことが必要であると主張した。

第４報告　富樫正浩氏（公認会計士）「北海道における会計業界の現状と課題」。富樫氏はまず，北海道経済の特徴として，札幌への一極集中が進んでいる点，二次産業比率が低い点，インバウンドにより観光地の状況が変化している点をあげた。北海道の会計専門家は，公認会計士はその９割が札幌圏に，税理士はそのうち７割が15支部のうち札幌の５支部に集中している。北海道での会計業務は，公認会計士の半数しか税理士登録しておらず，十分な監査業務が存在している。税務業務では，都市部では企業中心だが，地方では一次産業従事者が多く個人申告も大規模になることがある。社会福祉法人，農業協同組合や漁業協同組合への監査業務の拡大が予測されているが，会計士の数は不足気味であり，AIによって監査業務を効率化する必要がある。自動仕訳の増大により入力から指導へと税務業務は変化している。両業務に共通して，AIに仕事が奪われるようなイメージを払拭し，人気が高まるよう，会計教育者に魅力のアピールを求めた。

報告後，籏本を座長とする討論が行われ，教育機関での簿記教育に求めること，あるいは共同で取り組んでみたいことについて意見交換がなされた。また，フロアーとの質疑応答も行われた。

日本簿記学会第35回全国大会記

中央大学
準備委員長　上野清貴

日本簿記学会第35回全国大会は，8月23日(金)から8月25日（日）までの3日間にわたり中央大学多摩キャンパスで開催されました。本大会では「簿記教育の現代的課題」を統一論題のテーマに設定し，200名を超える方々に参加いただきました。大会第1日目（23日）には，学会賞審査委員会および理事会が開催されました。

大会2日目（24日）の午前には，恒例となった高校簿記教育懇談会が開催され，加瀬きよ子氏（東京都立芝商業高等学校）の司会の下，川村義則氏（早稲田大学）による報告「簿記教育の課題」が行われ，高等学校の教員に加え，多くの大学教員を集めました。午後からは会員総会，渡邉泉氏（大阪経済大学名誉教授）による学会賞受賞講演の後，統一論題報告が行われました。

統一論題報告は，座長の坂上学氏（法政大学）による趣旨説明が行われた後に，①吉田智也氏（中央大学）による「収益認識に関する会計基準と簿記処理」，②和田博志氏（近畿大学）による「損益振替仕訳の教育方法」，③田中英淳氏（岐阜県立岐阜商業高等学校）による「高大接続における高等学校の簿記教育について」，④仲尾次洋子氏（名桜大学）による「簿記教育における高大連携の取り組み―那覇商業高校初年次を対象として―」という4つの報告が行われました。理論と教育の2つの視点から，簿記教育の現代的な課題を問う大変興味深い内容でした。

続いて，梅原秀継氏（明治大学）の司会の下，3つの研究部会報告が行われました。①簿記理論研究部会では「AI時代のコンピュータ会計と簿記」（部会長：岩崎勇氏，九州大学），②簿記教育研究部会では「簿記講義法に関する研究～ティーチング・ティップスの作成～」（部会長：宗田健一氏，鹿児島県立短期大学），③簿記実務教育部会「非営利組織体の簿記に関する研究」（部会長：小野正芳氏，千葉経済大学）の3つの研究部会がそれぞれ中間報告を行いました。その後中央大学生協ヒルトップにおいて130名を超える参加者により懇親会が行われました。

大会3日目（8月25日）には午前中に4会場で合計14の自由論題報告が行われました。第1会場では，池田公司氏（甲南大学）の司会の下，堀江優子氏（明星大学）と増子敦仁氏（東洋大学）・平澤哲氏（大原学園）の報告が，また齊野純子氏（関西大学）の司会の下，新谷弥氏（市立札幌啓北商業高等学校）と川崎定昭氏（公認会計士・税理士）の報告が行われました。第2会場では，浦崎直浩氏（近畿大学）の司会の下，伊奈波晃氏（中央大学大学院生）と髙橋聡氏（西南学院大学）の報告が，また丸山佳久氏（中央大学）の司会の下，孔炳龍氏（駿河台大学）と藤浪英也氏（白鷗大学）の報告が行われました。第3会場では，菱山淳氏（専修大学）の司会の下，塚原慎氏（帝京大学）と小坂敬志氏（日本大学）の報告が，また佐々木隆志氏（一橋大学）の司会の下，市川紀子氏（駿河台大学）・小野正芳氏（千葉経済大学）の報告が行われました。第4会場では，橋本武久氏（京都産業大学）の司会の下，中野貴元氏（全国経理教育協会）と石川業氏（小樽商科大学）の報告が，また清水泰洋氏（神戸大学）の司会の下，山口峰男氏（PwCあらた有限責任監査法人）の報告が行われました。自由論題の後，統一論題討論が行われ，座長の坂上学氏を中心に4名の報告者とフロアからの多くの参加者を交えながら，活発な討論が展開されました。

非常に厳しい日程の中，すべてのプログラムをほぼ予定通りに進めることができました。時間的制約の中での進行にご協力いただきました司会者・報告者および大会に参加してくださった先生方に厚く御礼申し上げます。また，厳しい残暑にもかかわらず，多摩まで電車を乗り継いで大会に参加してくださった先生方に心より感謝の意を申し上げ，第35回全国大会の報告とさせていただきます。

《ずいひつ》

越し方を振り返って

大阪経済大学　渡　邉　　泉

会計史研究を生業（なりわい）として半世紀近くもの歳月が流れ去った。気がつけば，若き時代に教わった多くの先生方は，すでに鬼籍に入られた。人生実（げ）に泡沫（うたかた），言い知れぬ寂寥感に襲われている。学部，大学院時代には大学紛争が吹き荒れ，心友たちと自己の存在や時間，学問する意義について熱く語った。「三つ子の魂，百まで」ではないが，原稿に向かうたびに当時の思いが蘇ってくる。会計学者は，時代の良心でなければと。

簿記の歴史に初めて触れたのは，学部1回生の小島男佐夫先生の講義であった。欧米各地の古文書館を歴訪された印象が冷めやらぬままに，授業は，いつも水の都ベニスで始まり花の都フローレンスで終わった。なぜ資産の増加は借方なのか，想像力を駆り立てられる講義であった。しかし，記帳手続きの話は20分か30分ほどで，それでは難解な仕訳や決算手続をマスターするには程遠く，試験の時には多くの仲間たちが頭を抱えた。

会計史の研究に本格的に取り組んだのは，大学院に進みリトルトンやペンドルフそれにヤーメイを読み始めた頃からである。以来，損益計算制度の展開や会計学の誕生が私の生涯の研究テーマになった。1年のオーバードクター後，大阪経済大学に職を得て，会計史学会の前身である大阪市大の研究会に参加した。白井佐敏，辻厚生両先生との出会いもこの頃であった。就職が決まった際，小島先生から「論文は，必ず年に1本，できれば2年で3本，書き過ぎてはダメ。内容が雑駁になる。遅くとも10年で1冊，教科書は，50歳を過ぎてから書くように」と強く言われた。

40歳までに1冊と念じ，処女作『損益計算史論』（森山書店，1983年）を脱稿したのは，38歳の秋が深まる頃であった。ただ，出版には障壁が待っていた。主題の損益計算制度の展開を始めいくつかの内容に小島学説批判が内在していたからである。後年，研究の進化によって内容にいくつかの修正を余儀なくされるが，なんとか1年遅れの出版にこぎつけることができた。

＊　＊　＊

イギリスが専攻の私だが，研究対象が中世イタリアから現代にまで及んでいるのは，泉谷勝美，高寺貞男両先生のお蔭である。泉谷先生とは，奉職後に出講日も昼食もそして学会もいつも一緒して，中世イタリア商人の帳簿と近世イギリスの簿記書の比較に口角泡（あわ）を飛ばした。唯一閉口したのは，学会出張の際，「泉さん，ホテルはツインでいいぞ」と言われることである。夜のいびきにはいつも悩まされた。これも授業料のうちであったのだろうか。

高寺先生とは家が近かったお蔭で幾度となく西向日の旧宅に足を運ばれ，欧米の最新の研究動向と手法を叩き込まれた。私もまた草稿が出来上るたびに先生のお宅に自転車でお邪魔し，多くの指摘を頂いた。長岡天神近くの喫茶店で，コーヒー1杯で3時間近く話し込んだことも一度や二度ではなかった。さぞかし，店は迷惑なことであったろう。

振返えると，私もすでに当時の先生方の年齢に近づいてきた。さて，若き研究者に一体どれだけの刺激を与えることができているのか。そう考えると，思わず背筋が寒くなる。せめてもの償いにと，『会計学の誕生―複式簿記が変えた世界』（岩波新書，2017年）の終章での消化不良を『会計学者の責任―歴史からのメッセージ』（森山書店，2019年）で書き綴った。若き人たちへの道標になったであろうか。諸兄姉のご批判を乞う。できればもう一冊と，脱稿したところである。さて，どこか引き受けてくれるところがあるであろうか。

平成30年8月23日以降，令和元年8月22日までに申し込まれ，8月23日開催の理事会で入会が承認された新会員は以下の通りです。

入会会員名簿

（名簿の番号は会員番号）

番号	氏名	所属機関	番号	氏名	所属機関
2019-001	安藤　鋭也	公認会計士	2019-016	小林　正典	和光大学経済経営学部
2019-002	小川　晃司	税理士	2019-017	前中　孝洋	北海道小樽商業高等学校
2019-003	東城　歩	(学) 新潟総合学院	2019-018	須浪　浩明	財務省北海道財務局
2019-004	中村　元彦	千葉商科大学会計大学院	2019-020	山木　政行	東大阪市立日新高等学校
2019-005	岡田　幸彦	筑波大学	2019-021	杉本　祐紀	滋賀県立大津商業高等学校
2019-006	山下　奨	跡見学園女子大学マネジメント学部	2019-022	笠木　智広	PwCあらた有限責任監査法人
2019-007	阿久津　功	栃木県立真岡北陵高等学校	2019-023	渡邊　隆	鹿児島商業高等学校
2019-008	坂本　由季	東京都立第一商業高等学校	2019-024	新留　崇夫	鹿屋市立鹿屋女子高等学校
2019-009	畑中　孝介	ビジネス・ブレイン税理士事務所	2019-025	清川　康雄	鹿児島県立川内商工高等学校
2019-010	若原　憲男	豊橋創造大学経営学部	2019-027	佐々木義治	島根県立浜田商業高等学校
2019-011	堺　昌彦	小樽商科大学	2019-028	中村　文彦	長野県立大学グローバルマネジメント学部
2019-012	髙久　文夫	澤の露本舗	〈準会員〉		
2019-013	土井　貴之	兵庫県立神戸商業高等学校	2019-019	中林　龍生	日本大学大学院商学研究科
2019-014	富樫　正浩	公認会計士富樫正浩事務所	2019-026	松田　隼汰	明治大学大学院経営学研究科
2019-015	林谷　昌美	日高町役場			

大会・部会の風景

関東部会

全国大会

編集後記

会則改正により幹事が増えました。さらに学会活動が充実するよう努めてまいります。

（石光・小澤・小阪・中村・兵頭・松下・吉田）

発行所
編集兼
発行人　**日本簿記学会事務局**

事務連絡所
〒101-0021 東京都千代田区外神田5-1-15
株式会社白桃書房
e-mail　boki@hakutou.co.jp
URL http://www.hakutou.co.jp/boki/